

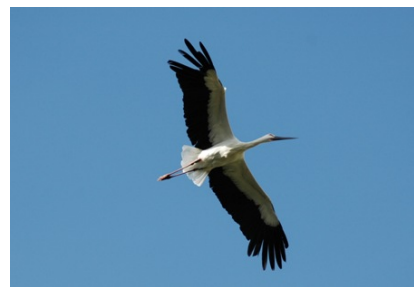
コウノトリを中心とした環境保全活動への全庁的取組

【取組の概要】100年にわたるコウノトリの保護、野生復帰、共生のまちづくり ～ふるさと“豊岡”を愛する人々の無限の挑戦～

2005年9月24日、豊岡市の^{しょううんじ}祥雲寺地区の静かな田園地帯に、世界的にも貴重な瞬間を見ようと、全国から7,000人を越える人々が集まった。午後2時30分、人々が注目するコウノトリの郷公園内の一角に、高さが1m以上ある大きな木製の箱が5つ運ばれてきた。その箱の中では、豊岡の人々が再び出会うことを夢見てきた愛する“宝モノ”が息をしていた。そして、その箱の扉が開くと、夢の宝モノが大きく翼を広げて飛び出してきた。

大きく白く美しい鳥、「コウノトリ」である。大きな翼を二度三度と羽ばたかせ、真っ白な体が宙に浮き、大空へ舞って羽ばたいていくと、一瞬静寂を保っていた人々が、「うおー！、飛んだ！、飛んだぞ！」と一斉に大歓声を上げた。大声をあげて絶叫する人、拍手を送る人、カメラのシャッターを必死に切る男性、思わず涙ぐむ女性、手をあわせて拝んでいるお年寄り、夢にまで見たその瞬間に集まった人々は心から感動した。

この瞬間に至る100年もの歳月、コウノトリを愛し、ふるさとを愛して夢を追い続けてきた豊岡の人々の取組。その後も、コウノトリと共に豊かに生きていくことを夢見てまちづくりを続ける豊岡の人々の取組。それはまさに、大空を羽ばたくコウノトリのように、果てなき挑戦者の姿である。



豊岡の大空を羽ばたくコウノトリ

1. コウノトリ保護 100年の歴史のはじまり

明治時代から始まったコウノトリ保護の取組

コウノトリ（ニホンコウノトリ）の体長は1m強、体重は5kg程で、翼を広げると2mにもなる大きな鳥である。かつて、コウノトリは日本各地に生息していた鳥であった。文献や江戸時代の絵巻物などから、豊岡盆地にも生息していたことが分かる。



人里に舞い降りたコウノトリ

明治時代になると、コウノトリは乱獲の対象となり、一気にその数は減少していった。1892年には、狩猟規則が公布され、鶴やツバメなどの鳥が保護鳥とされたが、水田を餌場とするコウノトリは稲を踏むことから、「有害鳥」とであると認識され、保護鳥の対象にはならなかった。1908年の狩猟法改正で、鳥獣保護の根拠に初めて希少性が加えられ、コウノトリも保護鳥に追加指定されたが、その頃には既に全国的に絶滅に近い状態となっていた。

当時、豊岡盆地にはまだコウノトリが生息しており、人々はコウノトリがいることを当たり前のこととして受けとめていた。豊岡とその周辺の但馬地域では、古くからコウノトリを「ツル」と呼んで、めでたい鳥「瑞鳥」として愛でる習慣があった。コウノトリの営巣地がある出石（現豊岡市出石町）の「鶴山」には、「ツル」見物のための茶店が出され、市外からも大勢の人が巣ごもりの様子を眺めにやってきました。明治後半から大正時代にかけて、県や旧室埴村はこの鶴山の保護に乗り出すようになり、地元の旧室埴村は保護を訴える看板を立てるなどして見物人へのマナー啓発を行った。兵庫県は鶴山の周囲18kmを銃猟禁止地に指定し、国は鶴山をコウノトリの繁殖地として、史跡名勝天然記念物に指定した。そうした保護の取組によって、大正から昭和初期の但馬地域では、コウノトリの生息数が急激に増えていった。

だが、第二次世界大戦が始まると、木材の大量伐採や戦禍により、全国各地の里山が荒廃・破壊され、松の木に巣をかけるコウノトリは営巣環境を失い、生息数が減少していった。

戦後の高度成長期の環境破壊とコウノトリ保護の取組

戦後、高度経済成長とともに起こった様々な環境破壊により、豊岡盆地の生息環境も破壊されていく。大規模な圃場整備や河川改修によって、豊岡盆地一帯に広がっていた「ジル田」と呼ばれる湿田や湿地が消滅し、さらに、農薬が普及し始めたことで田んぼの生きものが激減した。コウノトリは、生息環境と餌となる生きものを失い、その上に農薬で体がむしばまれたことで、生息数が急激に減少していった。

こうした状況に対して、1953年、国においてコウノトリに対する天然記念物の指定方法が変更され、従来の「生息地」を指定する方法から、「種」の保護を目的に「種」そのものを指定することとされた。地元の豊岡市は兵庫県とともに、人々になじみ深いコウノトリを絶滅させるわけにはいかないと、1950年代半ばから、組織的な形で保護活動に取り組み始めた。まず、1955年に行政と民間が共同して、「コウノトリ保護協賛会」を結成した（1958年に「但馬コウノトリ保存会」（以下、保存会）と改称）。保存会は、「コウノトリをそっとする運動」や、コウノトリの餌不足を解消するために県内各地からドジョウを持ち寄る「ドジョウ一匹運動」などの活動を展開した。コウノトリの営巣用に人工巣塔の設置も始めた。

しかし、人工巣塔の周辺の水田では、盛んに農薬が使われ続けるなど、コウノトリの生息環境はなかなか好転せず、保護運動の甲斐なく生息数は減り続けて、1959年を最後にヒ

ナは一羽も生まれなくなった。そして、野生のコウノトリが12羽にまで減った時、野生での保護を断念し、最後の手段として、人工繁殖に望みを託すことを決断、1965年、野生のコウノトリ2羽を捕獲し、人工飼育に踏み切った。

人工飼育によるコウノトリの“ヒナ”の誕生

それ以降、手探りの状態で繁殖を試みていったが、なかなか成果があがらず、人工飼育・保護・増殖は苦難の連続だった。1971年には、豊岡市内で生息していた最後の野生のコウノトリ一羽が衰弱のため保護・捕獲されたことで、日本の空からコウノトリは姿を消した。それでも飼育員を始めとして豊岡の人々は、けっして諦めることなく人工繁殖に取り組み続け、いつかヒナがかえる日を信じ続けた。

そして、ヒナがかえらない春を20回以上迎えること四半世紀が過ぎた1989年に待望の“ヒナ”が誕生した。野生のコウノトリを捕獲してから25年目、ようやく人工繁殖に成功したのである。それ以降は、毎年繁殖に成功してヒナが誕生し続け、人工飼育は軌道に乗りはじめた。この人工繁殖の成功が、その後の行政と住民のまちづくりの取組を大きく変えるきっかけとなった。

2. コウノトリの「野生復帰」への挑戦

(1) 「野生復帰」に向けた模索

人々の葛藤を経て決まった野生復帰への計画

コウノトリのヒナが次々と生まれ、飼育数が増え始めると、かつて豊岡の上空を飛んでいたコウノトリの姿を知る地元の住民や市職員の中から、もう一度、コウノトリが人里を美しく飛ぶ姿を見たいという夢が少しずつ語られ始めた。コウノトリ保護増殖の取組が、飼育下のコウノトリを野生へ帰すための議論に発展するようになったのである。

しかし、野生に帰すとなると、次にはもっと大きな課題を抱えることになる。コウノトリを飼育施設の中で守ろうとしたら、飼育員が餌を安定的に与えて、生きる環境を作ることには専念すればいい。だが、施設の外に放すのであれば、コウノトリだけでなく、その生息地を丸ごと保護しなければならなくなるため、里の生活環境に影響してくる。コウノトリだけでなく人間もすむ里をどうするか、人間がどう関わり、どんな暮らしぶりをしなければいけないか、まちづくりそのものの問題となる。特に一番大切なのは、コウノトリの餌生物が多くすむ田んぼに関わる農業である。里に帰るコウノトリに対して人間がどう関わるか、それはまさに市全体に関わる大きな問題である。

1992年4月には、繁殖に成功した飼育下のコウノトリの今後の方向性を検討する機関として、学識経験者や地元関係者をメンバーとする「コウノトリ将来構想調査委員会」が設置された。委員会を中心として、今後、増えたコウノトリをどうするか、将来どうしてい

くかについて、様々な議論が交わされた。主な意見としては、「①どれだけ増えても飼育する（保護増殖だけ）」、「②兵庫県民の鳥だから動物園などいろいろなところで見せるようにする」、「③野生に帰す」の3つであった。

そして、検討を重ねた結果、同委員会は、1994年3月に、「コウノトリを野生に帰すこと」と「野生復帰の拠点を作ること」を盛り込んだ基本構想を発表し、コウノトリを野生に復帰させるという計画がスタートした。

(2)「害鳥」から「共に暮らす鳥」へ変わったコウノトリ

コウノトリ野生復帰に向けて救世主現る

県と市が野生復帰をめざすことを決めたもののコウノトリは、田んぼを踏み荒らす「害鳥」という認識が一般的であったため、飼育施設の外にコウノトリを放鳥して、人里で受け入れてもらうには、農家を始めた地元住民に理解してもらう必要があった。そのため、「兵庫県立コウノトリの郷公園」（後述）を整備するため用地確保をする際にも、住民の中からは、「あんな害鳥、放すんじゃないだろうな」といった声もあり、市の担当職員は、「あくまで自然に慣れさせるため」と曖昧な形で答えていた。

兵庫県立コウノトリの郷公園ができた後の2002年8月、野生のコウノトリが1羽、31年ぶりに豊岡に飛来した。昔から豊岡では、コウノトリに関わる取組で大きな転機を迎えて厳しい状況に追い込まれると、法律が変わったり、自然にやさしい農法を教える人が現れたり救世主が現れるとよく言われる。その飛来したコウノトリは、8月5日にやってきたことから「ハチゴロウ」と名付けられ、メディアで伝えられて広く市民に親しまれるようになった。

そこで、コウノトリの野生復帰を模索していた県と市では、そのハチゴロウを観察することで、コウノトリが田んぼをどの程度踏み荒らすかなどの被害調査を行った。すると、予想されたほどには田んぼが踏み荒らされることはなく、稲作が減収になることはない、ということが分かった。コウノトリが田んぼを踏み荒らさないことを証明したハチゴロウは、まさに放鳥と野生復帰へ向けての救世主となったのである。

その後、コウノトリが害鳥でないならば、コウノトリがすすめるような農業を「自分もやってみよう」という農家が現れるようになっていった。一方、市では、コウノトリと共に生きるまちづくりを進める決意を明確にし、総合的な観点から施策を推進するために、2002年から企画調整部門として「コウノトリ共生推進課」を設けていた。この頃から、市・県・国の行政と市民が一体となって、まちづくりに取り組もうとする気運が高まっていくことになった。

(3) 野生復帰に向けた「コウノトリと共生するまちづくり」へ ～「コウノトリ育む農法」への挑戦～

野生復帰の拠点づくりと地元農家の挑戦への決意

コウノトリを野生に帰すための拠点作りを模索していた豊岡市と兵庫県は、1992年、豊岡市内の祥雲寺地区（全23戸の集落）の住民に対して、「コウノトリを野生復帰させたい。そのための拠点施設を祥雲寺地区内に建設して、コウノトリと人と自然との共生する地域社会を目指したい」との申出を行った。

当時は、当然のように農薬を使用していたため、コウノトリ野生復帰拠点施設を祥雲寺地区に建設するという事は、住民にとっては、地区の農業そのものを変えていかなければならないことを意味していた。住民たちは、そういったことが出来るのかどうかの検討を重ねた。そして、2年間にわたる検討の末、1994年後半に、「自信はないけれども、とにかく向かっていこう」、「こんな農業をされていていいはずがない」、ということで、地区として野生復帰拠点施設（後の「兵庫県立コウノトリの郷公園」）建設を受け入れるという結論を出した。

地区住民は受入を決断した後、どのような対策が必要か繰り返し会議を重ね、各地に視察に行き、講師を呼んで話を聞くなどして、さらに2年間を費やした。そして、1996年になって、とにかく行動を起こそうということで、地区の住民有志が12名集まって、ボランティアで「祥雲寺を考える会」（翌1997年に「コウノトリのすむ郷づくり研究会」に発展的に改名）を立ち上げた。この会では、月1回集まって、自分たちの祥雲寺地区の現状を振り返り、どのようにしたらコウノトリの野生復帰事業の受入とともに、これからの環境創造型の農業を中核とした郷づくり、村づくりを行うことが出来るのか、自由かつ達意な意見交換を積み重ねた。また、先進地への視察や講師招へいなどを含めた広範な活動を繰り返した。

野生復帰に向けた2つの拠点施設のオープン

このように住民たちが新たな農業とまちづくりへの模索を進める中で、兵庫県が1999年に、コウノトリを野生に帰すための拠点として「兵庫県立コウノトリの郷公園」（以下、コウノトリの郷公園）を祥雲寺地区内にオープンさせた。コウノトリの郷公園は、「コウノトリの種の保存と遺伝的管理」、「野生化に向けての科学的研究及び実験的試み」、「人と自然の共生できる地域環境の創造に向けての普及啓発」の3つを基本的機能に位置づけ、コウノトリの飼育・保護・増殖、野生化に向けての研究、環境づくりなど多様な事業に取り組む拠点としての役割を果たすものとして作られた。

また翌2000年には、豊岡市が「豊岡市立コウノトリ文化館」を建設した。市立コウノトリ文化館は、コウノトリの郷公園の中で、「住民の視点に立った野生復帰事業」、「人と自然

の共生できる暮らし方を考え、実践し、提示」、「コウノトリ野生復帰推進計画の普及啓発」、「コウノトリを育ててきた豊岡盆地の特徴的な自然・文化の調査、保全」などを行うものとして作られた。

コウノトリの郷公園は、コウノトリの視点に立った取組（主に学術的な普及啓発）を担い、コウノトリ文化館は住民の視点に立った取組（主に文化的な普及啓発）を担うものとして、両施設が野生復帰事業において車の両輪のようになり、コウノトリと共生したまちづくりをめざしている。



コウノトリの郷公園にあるコウノトリ文化館と、飼育場のコウノトリ

住民の夢を描いた「郷づくり構想」

祥雲寺地区の住民有志が立ち上げた「コウノトリのすむ郷づくり研究会」では、コウノトリと人が共生できるまちづくりの構想について4年間かけて検討を重ねた結果、2000年に“コウノトリの郷公園と一体的なまちづくり”を目標とした「郷づくり構想目標」を「郷づくり報告書」としてまとめ、地区全体に提案した。郷づくり構想目標は、その後の地区の取組の原動力・羅針盤となり、これを基に具体的な活動を展開していった。

■祥雲寺地区における住民の活動理念

コウノトリの郷公園と一体的な活動を推進し、コウノトリと共に暮らせる環境を創ることは、そこにすむ人間がすばらしい自然環境を取り戻すことになる。その結果として、生産された農産物は人間の生命を守る食の安全・安心につながる。

■郷づくり構想目標

（祥雲寺地区 コウノトリのすむ郷づくり研究会「郷づくり報告書」2000年）
地区民の誇りとする豊かな自然と四季、地区の歴史を大切に保持するなかで、利便性のある生活環境づくり、コウノトリと共に暮らして行くための田園自然再生を軸とした環境創造型農業と、一集落一農場制を基調とした集落営農への取組を進める。

また、景観保全とまちづくり協定、地区民の意識啓発、地区の活性化への積極的な関わりには、地盤づくり・人づくりが重要となる。ただし、上記の事業を進展させるためには、強力な行政機関の支援、指導もまた求めつつ、郷づくり・村づくり・人づくりに向けた努力を続ける。

「コウノトリの郷営農組合」の立ち上げ

「郷づくり構想」での提案を実現していくために、住民有志8人が集まって営農組合を立ち上げようということになった。設立の理由は、農家の高齢化が進んでおり、担い手不足等から様々な問題が起こっていること。地元農家が抱える農業用機械等への過剰投資が農業を圧迫していること。そして、田んぼの生態系の頂点に立つコウノトリがすすめる環境に配慮した農業をやって行こうとすると、村ぐるみで組織的な取組をすることが必要不可欠になってくると考えたからである。そうした問題の解決を一体的に進めるために、2002年に地区の全戸加入で「コウノトリの郷営農組合」を結成した。以来、地区の住民たちは、営農組合を中心に毎年計画を立てて、環境に配慮した新たな農業づくりに取り組んでいった。

無農薬の農業をめざして草取りに追われた最初の挑戦

コウノトリと共に暮らせるような農業のあり方を新たに見つけようと、最初は減農薬による栽培から始めていき、1997年頃からはアイガモ農法(※)を取り入れた。だが、アイガモ農法は進めていくうちに、減農薬栽培としてはいいが、雑食性のため、草とともに、田んぼの中の生きものも食べてしまうため、コウノトリが巣立って田んぼに入っても餌がない、ということに気づいた。

そこで、営農組合は、アイガモ農法とは別に、生きものを育むと同時に、環境に配慮した農法を模索する事にした。最初に取り組んだ2002年は減農薬だったが、2003年に「兵庫県豊岡農業改良普及センター」(以下、普及センター)の協力で、無農薬・無化学栽培に初めて挑戦することとなり、先陣を切って一戸の農家に取り組んだ。その農家は、かねてからそれまでの農業のやり方に疑問を抱き、自然を大事にした農業を模索し続けていた人だった。だが、最初はうまく行かず、草取りに追われることになった。毎日朝から晩まで、3反の田んぼの草取りに追われ、それが2~3週間にも及んだ。その農家の男性は、「周りからは、『なにをやっとるんだ』、と冷たい目線で見られたんですよ」と当時を語る。しかし、「祥雲寺地区で取組を始めてしょっぱなで挫折するようでは、先が思いやられることもあるし、誰もついてきてくれないだろう、ということもあって、毎日毎日、来る日も来る日も、草取りに追われた」と話す。当時は、誰もが除草薬を使っていたため、「変わり者扱い」されたこともあったという。まさにたった1人での孤立無援の挑戦であった。当時を振り返って、「曲がりなりにも、1年間、無農薬でやり通した1年だったなあ」と話す。

(※)アイガモ農法とは、田んぼにアイガモを放して、殺虫剤や除草剤の代わりに駆除し、無農薬でお米を作る農法。

減農薬・無農薬への様々な模索

その年の稲刈りが終わった後、今度は田んぼに米糠^{こめぬか}を散布して、冬の間中、水を張る「冬期湛水^{とうきたんすい}」という方法を取り入れた。米糠などを餌にしてイトミミズやユスリカの幼虫などが活動することで、もともとの土とは別に微生物によりトロトロの層が5 cmから8 cmぐらい作られ、その層があることで草の種子が発芽しにくくなり、春になると草はほとんどなくなっている。

さらに、田植えの1か月間前から田んぼに水を張る「早期湛水」も取り入れた。冬期湛水が終わって早期湛水に入るまでの1か月間のいい天気の時には、田んぼを乾かす作業を行う。そのまま放っておいたら畦がもたないからである。畦直しをして、畦にシートを張って水漏れを起こさないような田んぼにした後に、早期湛水をする。

代かきをしてから、米糠ペレット（米糠とオカラを混ぜ合わせて乾燥させた細かい粒子状のもの）を蒔きながら田植えをする。それを餌にして、イトミミズやユスリカの幼虫が活動するため田んぼがいつも濁るようになり、光が入らなくなる。その後、海草に似た藻が発生し、それが田んぼ全面に覆って草の発芽を抑えるようになる。

また、従来なら6月中旬に田んぼを乾かす中干しをするが、それを1か月遅らせる「中干し延期」を取り入れた。6月中旬はまだオタマジャクシがカエルに孵っておらず、田んぼを乾かすとみな死んでしまう。そこで、1か月後の7月中旬まで中干しを延期して田んぼに水を残すと、オタマジャクシがカエルに孵る。そのカエルがカメムシなどの害虫を食べて大きな働きをするようになった。

「コウノトリ育む農法」の成功

そうした様々な手法を新たに導入することで、2005年に始めて、田んぼに一度も草取りに入らないでも稲を育てることができるところまで辿り着いた。完全な無農薬による抑草技術の農法の開発に成功したのである。この農法は、無農薬で田んぼにたくさんの虫がいるにも関わらず草が生えない。益虫と害虫がバランス良く混在して生息しており、無農薬でも稲が立派に育つのである。何年もかけて、失敗を繰り返しながらも地道に取り組んできた末に辿り着いた農法であり、農家の男性は「これこそが目指すべき農法だと分かった」と当時を振り返って話す。まさに、コウノトリと共生できる農法への第一歩を踏み出したのである。

そして、同年、この農法は「コウノトリ育む農法」として、豊岡市内全域に広がった。この時、最初たった一人で先陣を切った農家の男性は、「これでやっと、苦労が実った。その時は本当にうれしかった。今では懐かしい、いい思い出になった」と語る。普及センターの担当職員から、「これで“変わりもん”と言われなくてすみますなあ」と言われて、笑い合った。最初は1人でやり始めたが、その後、同じ農法を取り入れた仲間が次々と増えるようになってきていることについては、「教えてあげられるようなエラそうなことが言える状

態でなく、やっぱり、日々、勉強だし、実証だし、そういう中でのこと。そんなに自信を持って言えるような段階でもなかった。一緒になって、普及センターとともに取り組んだだけ」と話す。

この同じ年、2005年9月には、コウノトリの試験放鳥が実現し（後述）、野生復帰への第一歩も実現した。



田んぼで腰をかがめる農業者と、ドジョウを食べるコウノトリ

■「コウノトリ育む農法」の定義

おいしいお米と多様な生きものを育み、コウノトリもすすめる豊かな文化、地域、環境づくりを目指すための農法
 （安全なお米と生きものを同時に育む農法）

■「コウノトリ育む農法」の要件

	共通事項	努力事項
環境配慮	◇化学農薬削減 <無農薬タイプ> ・栽培期間中不使用 <減農薬タイプ> ・当地比7.5割減 ◇農薬を使用する場合は普通物魚毒性A類 ◇化学肥料削減 栽培期間中不使用 ◇温湯消毒 ◇畦草管理	◇魚道、生きものの逃げ場の設置 ◇抑草技術の導入（米糠、その他） ◇生きもの調査
水管理	◇深水管理 ◇中干し延期 ◇早期湛水	◇冬期湛水
資源循環	◇堆肥・地元有機資材の活用	
その他	◇ブランドの取得 （有機JAS、ひょうご安心ブランド、コウノトリの舞、コウノトリの贈り物）	

「コウノトリ育む農法」の普及に向けた挑戦

「コウノトリ育む農法」を最初に実施した祥雲寺地区の農家の男性は、「この集落は、戸数が少なく、まとまりやすかったからうまくできた」と話す。最初の祥雲寺地区の集落がうまく行かないと、市内他地区へ広めていくのが難しいため、行政も普及センターを中心に熱心に取り組んだ。

祥雲寺地区の農家が営農組合を立ち上げた翌年の2003年には、取組を広げようと周辺の幾つかの集落にも働きかけをした。複数の集落で環境に配慮した一つのゾーンにしようとして計画をたて、地区の農会長や農業関係者に集まってもらい、組織の立ち上げを図った。しかし、他集落との考え方や事情の“温度差”は大きく、議論を重ねてもなかなか合意に辿り着かず、少し時間を置かないといけないということで頓挫した。祥雲寺地区の農家の男性は「そんな苦い思い出もある」と話す。

それでも諦めず、男性は、「逆に離れたところの集落の人たちに働きかけてみよう」と、取組の普及を図ったところ、以外にも積極的な動きが生まれたという。さらに、「ここでの取組がここだけで終わってしまっては駄目だ。広めて行こうと思ったら、但馬全域に組織を持つ農協の活動を活かしていかないといけない」ということで、農協などにも協力を働きかけ続けた。そして2006年には、ついに農協が動いて、「コウノトリ育むお米生産部会」が設立された。農協を事務局として、祥雲寺地区をはじめ各地区の営農組合や大規模農業者などが集まって一つの組織を立ち上げた。地道な働きかけを行ってきた農家の男性は、「画期的なことだったと思う」と話す。今では、豊岡市内で183ha、但馬全域で250haほどに、「コウノトリ育む農法」が拡大している。

3. コウノトリをシンボルとした環境経済共鳴のまちづくりへの挑戦

コウノトリの野生化への第一歩 ～試験放鳥の実施～

2005年9月24日、祥雲寺地区で初めてのコウノトリの試験放鳥が行われた。コウノトリ5羽が里に放たれ、野生化への第一歩に成功した。この試験放鳥は、コウノトリ保護100年の歴史の中で、一つの大きなターニングポイントとなった。試験放鳥は、全国的に大きな注目を浴び、各地から7,000人を超える人々が集まり、マスコミにも大きく取り上げられた。市の当時の担当職員は、「それまでは、いくら情報を発信してもなかなか広がらなかったが、試験放鳥を機に一気にメジャーデビューした感じで、それ以来、豊岡のコウノトリは全国で知られるようになった」と話す。そして、全国から高く評価されるようになり、「コウノトリ育む農法」で育てた米が高く売れたり、各地から多くの観光客が訪れるなどして経済的にも様々なメリットが目に見え出すようになった。それにより、住民や行政職員の意識も大きく変わった。

“環境と経済の共鳴”のまちづくりに向けた「豊岡市環境経済戦略」

コウノトリを放鳥して地域で育てるために、コウノトリと共に暮らせるような地域社会をめざして、「コウノトリ育む農法」を取り入れた農業が広がるようになった。そうした環境にやさしい無農薬・減農薬の農法で作った米は高く売れるようになった。この米を2004年には兵庫県認定「ひょうご安心ブランド」の「コウノトリの郷米」として、また豊岡市認定の農産物ブランドの「コウノトリの舞」として売り出すようになった。そして、コウノトリの放鳥を機に全国から注目を浴びるようになったことで、この米はコウノトリをシンボルとしたブランドとして確立した。そのため、「コウノトリ育む農法」を導入して米を作る農家が一気に増えることになった。

豊岡市では、一連の流れを受けて、「環境と経済が共鳴」するようなまちづくりの取組を全市的に様々な分野で波及させて行こうと、2005年3月に「豊岡市環境経済戦略」を策定した。「環境への取組によって経済効果が生まれる。その経済効果が生まれることによって、もっと環境への取組を頑張ろうということになる。そして、もっと頑張ればさらに儲かる。だから環境への取組がますます増えて、ますます儲かるようになる」、というのが環境経済戦略の基本的な考え方である。



コウノトリ育むお米
(安全なお米と生きものを同時に育む農法で育てたお米)



「コウノトリの舞」の農産物

■「豊岡市環境経済戦略」

◇理念

環境を良くする取組と経済活動が、刺激し合いながら高まっていく。
“環境と経済が共鳴”するような地域を創りあげる！

◇ねらい

- ・「持続可能性」：経済効果により環境への取組を持続可能にする
- ・「自立」：環境を生かして経済的に自立する
- ・「誇り」：環境によって経済が成り立つ地域に誇りを感じる

◇「豊岡市環境経済戦略」の5つの柱

- ・「豊岡型地産地消」を進めます
- ・「豊岡型環境創造型農業」を推進します
- ・「コウノトリツーリズム」を展開します
- ・「環境経済型企业」の集積を進めます
- ・「自然エネルギー」の利用を進めます

豊岡市では、「環境経済戦略」の具体的な取組の一つとして、大手旅行会社と協力してコウノトリをテーマとしたツアーを2006年から開催している。コウノトリを見学し、市内の城崎温泉に泊まり、但馬牛と「コウノトリ育むお米」を食べ、お土産に育むお米を持って帰る。取組をもっと詳しく知りたい場合は、市職員や農家から説明を聞く。そして、ツアー代金の売上の一部をコウノトリ基金に寄付してもらおうというものである。毎年1,000名ほどの人たちがツアーに参加し、豊岡を訪れている。また、コウノトリの野生復帰支援の思いを込めて、「ハチゴロウの^{としましっち}戸島湿地」^{まるやまがわ}周辺の円山川（豊岡市を流れる一級河川）河川敷を清掃する「清掃ボランティアツアー」も行われた。その他、団体旅行の主要コースにもなっているコウノトリの郷公園には、個人客も含めて多くの観光客が訪れるようになっている。コウノトリの郷公園の入場者数は、2005年度の24万人から、2006年度49万人、2007年度45万人と増えており、コウノトリをシンボルとした「コウノトリツーリズム」の取組が交流人口の拡大をもたらしている。

2003年度からは市民を対象に毎年テーマを変えて継続的に「市民環境大学」を開催し、環境教育にも取り組んでいる。年間6回開講し、定員40名、参加費3,000円、これまでのテーマは、「円山川」「食と農」、「住まいと環境」、「豊岡型スローライフ」などで、2008年度は「森林の保全と野生動物」をテーマとして開催された。

また、豊岡の森は昔とは植生が様変わりしたため、地域住民が協力して森づくりを始めている。松食い虫の病害に強い品種の松を植樹し、コウノトリの営巣木を育てている。

4. コウノトリの郷「豊岡」のこれからも続く挑戦

NPOを通じたコウノトリの郷づくりへの挑戦

豊岡の住民や市の職員OBらが中心となって、2007年に、コウノトリの餌場づくりなどの活動を行う「NPOコウノトリ湿地ネット」を立ち上げた。その設立の理由を、NPO副代表は、「豊岡の自然環境は、コウノトリが絶滅した時よりも悪くなっているのに、コウノトリだけは調子がいい。これはおかしいことだと思う。その疑問からNPOを立ち上げた」、「コウノトリは放して人里に降りたら、行政の鳥ではなく、住民の鳥、地域の鳥となる。地域住民が鳥に関わらないといけなくなった。住民がコウノトリに直接関わるためにNPOを作ろうと思った」と話す。

コウノトリが豊岡のまちのシンボルとなり、コウノトリを通じて全国から多くの人を訪れるようになり、農業や地場産業など地域経済の活性化にも少しずつ効果が現れるようになるなど、コウノトリをシンボルとしたまちづくりは無限の広がりを見せ始めている。そうした中、「コウノトリがいくらまちのシンボルとなっても、そのシンボルが今後も生きていけないと足元からまちづくりは崩れてしまう。シンボルが、今後もいきいきと生きられる環境を作らないと取り返しのつかないことになる。コウノトリはたくさんの餌を食べるが、その餌を今の自然環境では十分に確保できなくなるおそれがある。そういう意味で危

機感を持っている。だから、NPOを作って、コウノトリの餌場を意図的に作っていかう、ということになった」とNPO副代表は話している。

自然再生ができて、コウノトリが生きていけるかどうかは別問題なのである。コウノトリは非常に多くの餌を食べる。コウノトリが餌を十分に取れる条件を、農業生産の場とは別の場所で、コウノトリの餌場を作らないと限界がある。そこで、NPOでは、コウノトリが餌をうまくとれる環境づくりとして、住民たちの手で餌場となる小規模湿地づくりを行っている。また、NPOでは、毎日、放鳥されたコウノトリを観察して、目撃情報をホームページに載せる取組を行うなど、様々な活動を展開している。

終わりなき「コウノトリと共に暮らすまちづくり」

2000年7月に、「人と自然の共生」をテーマとした「第2回コウノトリ未来・国際かいぎ」が豊岡で開催された。その会議において、海外から招へいた参加者のスピーチの中で、「豊岡でのコウノトリの野生復帰は『雪の玉』に似ている。(素晴らしいことだがやるが増えるで大変ですねという良い意味で) お気の毒に」との発言があった。市の当時の担当者は、そのスピーチを思い出しながら、次のように話す。

『雪の玉』が坂道を転がりだすと、無限に大きくなり、しかも止まることがない。コウノトリを野生復帰させようと思えば、個体数を増やさなければいけない。個体数を増やすには、そのための施設が必要となり作らなければいけない。そのためには、また何かしなければいけない。コウノトリを放鳥するために自然環境を良くしなければいけないなら、そのために無農薬・減農薬の農業をしなければいけない。農業をしっかりしなければと思えば、こうせんなあかん、ああせんなあかんとなる。後継者を育てなければいけないなら、義務教育からこうせんなあかん、ああせんなあかんとなる。そのように、やらなければいけないことが『雪の玉』のようにどんどん増えていく。今まさに、そのようになっている。」

豊岡では、「環境経済戦略」でうたっているように、コウノトリがまさに「まちづくりのシンボル」のようになっている。豊岡の環境保全、地域産業の振興、国際交流、教育等々、様々な分野の取組が、コウノトリを核（シンボル）として、新たな展開を見せるようになっている。コウノトリに長く関わってきた市の担当職員OBは言う、「コウノトリを野生に帰す自然再生の政策とそれを通じたまちづくりの政策では、一週間前のことはもう古い。視察が来ても、テーマはいろいろな角度から見るとたくさんあり、常に変わっている。昨年の事は過去の事でしょ、今とは違う。前年どおり、前例どおりは通用しない。マンネリになりようがない、やる事がむしろ増えている。コウノトリと共に暮らすまちづくりは終わりがなし」と。